

新学習指導要領で評価が変わる！

新学習指導要領における学習評価の進め方 (中学校 美術科)



平成 24 年度から，中学校では新学習指導要領が全面実施となります。新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方については，平成 23 年 7 月に「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」が，国立教育政策研究所教育課程研究センターから示されているところです。この「学習評価の進め方」は，新学習指導要領に基づく学習評価を円滑に進めていくための手引きとして，佐賀県教育センターが作成したものです。各学校における新学習指導要領に基づいた指導と評価を推進していくためにお役立てください。

(主な内容)

- 1 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方とその具体
- 2 中学校美術科における教科目標，評価の観点とその趣旨について
- 3 中学校美術科における学習評価の進め方
- 4 中学校美術科における学習評価事例
- 5 中学校美術科における学習評価の進め方 Q & A



◆ 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の下での学習評価については、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒の一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、目標に照らしてその実現状況をみる評価（目標に準拠した評価）を着実に実施し、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要です。併せて、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが求められています。

◆ 各学校における学習評価の進め方と留意点

各学校においては、評価規準を適切に設定するとともに、評価方法の工夫改善を進めること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要です。また、年間指導計画を検討する際には、それぞれの単元（題材）において、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を観点ごとに整理することが重要です。このことが、評価すべき点を見落としていないかの確認や、必要以上に評価機会を設けることによる無駄を省き、効果的・効率的な学習評価を行うことにつながります。

◆ 新学習指導要領における学習評価の観点について

(1) 従前と新学習指導要領における学習評価の観点

従前の観点		新学習指導要領における観点
「関心・意欲・態度」	→	「関心・意欲・態度」
「思考・判断」	→	「思考・判断・ <u>表現</u> 」
「技能・ <u>表現</u> 」	→	「技能」
「知識・理解」	→	「知識・理解」

(2) 新学習指導要領における学習評価の観点の説明

「関心・意欲・態度」

これまでと同様、各教科の学習に即した関心や意欲、学習への態度等を対象としたもので、その趣旨に変更はありません。

「思考・判断・表現」

「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味しています。つまり、ここでいう「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としています。

「技能」

従前において「技能・表現」として評価されていた「表現」も含む観点として設定されています。

「知識・理解」

これまでと同様、各教科において習得した知識や重要な概念を習得しているかどうかを内容としたもので、その趣旨に変更はありません。

中学校美術科における教科目標、評価の観点及びその趣旨

1 教科目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

「美術文化についての理解を深め」という内容が追加され、我が国の美術文化に関する鑑賞を通して美術文化についての理解を深めることが求められています。

2 評価の観点及びその趣旨

美術への 関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	感性や想像力を働かせて豊かに発想し、よさや美しさなどを考え心豊かで創造的な表現の <u>構想を練っている</u> 。	感性や造形感覚などを働かせて、表現の技能を身に付け、 <u>意図に応じて表現方法などを創意工夫し</u> 創造的に表している。	感性や想像力を働かせて、美術作品などからよさや美しさなどを感じ取り味わったり、 <u>美術文化を理解したりしている</u> 。

※下線部は改訂のポイントとなる部分であり、教育センターによる。

- 「発想や構想の能力」の観点の趣旨では、従前の「構想をする」が「構想を練っている」に改訂され、構想を練っている過程が重視されています。
- 「創造的な技能」の観点の趣旨では、意図に応じて表現方法などを創意工夫し表すことが重視されています。
- 「鑑賞の能力」の観点の趣旨では、「美術文化を理解したりしている」が追加され、知識的に鑑賞するだけで終わらず、過去の作品の特質に気づき、伝統や文化に対する理解を深めることが重視されています。

3 学年別の評価の観点の趣旨

	美術への 関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
第1学年	美術の創造活動の喜びを味わい、表現や鑑賞の能力を身に付けるために、主体的に学習に取り組もうとする。	感性や想像力を働かせて、感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に豊かに発想し、形や色彩の構成などを工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。	感性や造形感覚などを働かせて、形や色彩などの表し方を身に付け、意図に応じて材料や用具を生かしたり、制作の順序などを考えたりし、創意工夫して表している。	感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、生活の中の美術の働きなどを感じ取り見方を広げたり、美術文化の特性やよさに気付いたりしている。
第2・3学年	美術の創造活動の喜びを味わい、表現や鑑賞の能力を高めるために、主体的に学習に取り組もうとする。	感性や想像力を働かせて、対象を深く見つめ、感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に独創的で豊かな発想をし、形や色彩などの効果を生かし、心豊かで創造的な表現の構想を練っている。	感性や造形感覚などを働かせて、材料や用具の特性を生かし、表現意図に合う新たな表現方法を工夫したり、制作の順序などを総合的に考えたりするなどし、創意工夫して創造的に表している。	感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わったり、生活を美しく豊かにする美術の働きや美術文化などについての理解や見方を深めたりしている。

中学校美術科における学習評価の進め方

中学校美術科の内容のまとめごとの評価の観点

- 「A表現・内容（１）（３）感じ取ったことや考えたことの表現」・・・・・・・・・＜絵画・彫刻＞
- 「A表現・内容（２）（３）目的や機能の表現」・・・・・・・・・＜デザイン・工芸＞

【美術への関心・意欲・態度】【発想や構想の能力】【創造的な技能】の３観点について、学習状況を評価します。

「B鑑賞」

【美術への関心・意欲・態度】【鑑賞の能力】の２観点について、学習状況を評価します。

※「A表現」と「B鑑賞」の両方を含んだ題材を設定する場合は、４つの観点の全てを評価することになります。また、「美術への関心・意欲・態度」は、表現と鑑賞の両方に位置付けることになります。

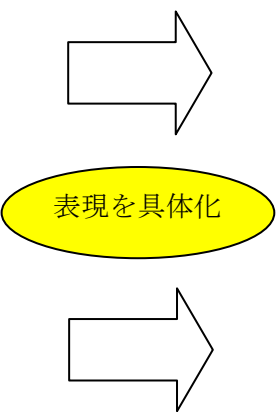
評価規準設定の進め方

各学校において評価規準を設定するに当たっては、国立教育政策研究所から公開されている「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」（以下，参考資料と表記）を基に，題材の内容に応じて「評価規準に盛り込むべき事項」と「評価規準の設定例」の記述を具体化することが考えられます。

評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料(国立教育政策研究所)

評価規準に盛り込むべき事項

評価規準の設定例



各学校で作成する評価規準

題材の評価規準

※題材ごとに設定する評価規準であり，題材の目標と評価との関連を確認したり，題材における評価の重点を捉えたりする場合に有効です。

学習活動に即した評価規準

※授業の中での具体的な学習活動の評価規準であり，実際の評価は，これに基づいて行うことになります。

※各学校で設定する「題材の評価規準」は，指導する学年や指導事項と照らし合わせて，参考資料の該当する「評価規準に盛り込むべき事項」を参考にして設定します。同様に，各学校で設定する「学習活動に即した評価規準」は，参考資料の「評価規準の設定例」を参考にして設定します。

具体的には、次に示すような手順で評価規準を設定していきます。ここでは「発想や構想の能力」の評価規準を設定してみましょう。

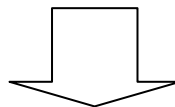
＜第2学年及び第3学年の観点：「A表現・内容（1）（3）感じ取ったことや考えたことの表現」の例＞

①「題材の評価規準」を設定します。

【発想や構想の能力】

「評価規準に盛り込むべき事項」

感性や想像力を働かせて、対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に、主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。



題材の内容に合わせて下線部を変更しています。

設定する「題材の評価規準」（題材「15歳の私」想像画）

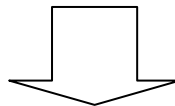
感性や想像力を働かせて、15歳になる今の自分の思いや夢などを基に、主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。

②「学習活動に即した評価規準」を設定します。

【発想や構想の能力】

「評価規準の設定例」

- ・対象を深く見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、考えたことなどを基に、主題を生み出している。
※題材が想像画なので、上記の設定例は使用していません。
- ・イメージを膨らませて夢、想像や感情などの心の世界などを基に、主題を生み出している。
- ・主題などを基に想像力を働かせ、形や色彩の効果を生かして単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。



①は題材の内容に合わせて下線部を変更しています。

②は「評価規準の設定例」をそのまま使っています。

設定する「学習活動に即した評価規準」（題材「15歳の私」想像画）

- ①イメージを膨らませて15歳になる今の自分の思いや夢などを基に、主題を生み出している。
- ②主題などを基に想像力を働かせ、形や色彩の効果を生かして単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。

各観点における評価内容と評価を行うに当たっての留意点

【美術への関心・意欲・態度】の評価

この観点は、生徒が学習内容や学習活動に興味・関心をもち、表現や鑑賞の学習に主体的に取り組もうとする意欲や態度を身に付けているかどうかといった学習状況进行评估するものです。

表現活動では、発想や構想を練るためにアイデアスケッチを繰り返し描いたり、創造的な技能を働かせるために絵の具の混色や塗り方を工夫したりするような能動的な姿が授業の中で表れることがあります。鑑賞活動では、作品を鑑賞しワークシートに感じ取ったことや考えたことを繰り返し書いたり、自分の考えを発言し進んで意見を交流したりするような能動的な姿が授業の中で表れることがあります。机間指導等の際にこのような姿を捉え、評価を行うことが大切です。挙手や発言の回数、忘れ物の有無といった表面的な状況のみに着目することにならないように留意します。また、この観点は、ある程度長い区切りの中において、適切な頻度で多面的に評価することが大切です。

【発想や構想の能力】の評価

この観点は、生徒が感じ取ったことや考えたこと、目的や機能を基に、形や色彩などの効果を生かして造形的な美しさなどを総合的に考え、表現の構想を練っているかどうかといった学習状況进行评估するものです。

この観点の評価では、活動中の行動の観察やワークシートの記述、アイデアスケッチなどから主題や表現意図を丁寧に読み取ることが大切です。また、発想や構想は、制作が進む中で徐々に具体的な形になり、更にそこから深まることが多いため、制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の「発想や構想の能力」の高まりを読み取ることが大切です。

【創造的な技能】の評価

この観点は、生徒が材料や用具の特性を生かし、自分の意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表現しているかどうかといった学習状況进行评估するものです。

この観点の評価では、活動中の行動の観察や作品などから、材料や用具を活用し表現意図に合う表現方法を工夫しているかを丁寧に読み取ることが大切です。また、この観点は制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものであるため、制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の「創造的な技能」の高まりを読み取ることが大切です。

【鑑賞の能力】の評価

この観点は、造形的な要素を踏まえて作品のよさや美しさ、作者の意図や表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっているかどうかといった学習状況进行评估するものです。

この観点の評価は、生徒のワークシートの記述や発言内容などによるところが大きくなります。しかし、授業中に指導をしながら全ての生徒を評価することは困難であることから、授業中は、記録のための評価ではなく、より適切な指導をするための評価を中心に行い、記録に残す評価は、授業終了後にワークシートの記述などを基に評価をすることが基本となります。

具体的な評価方法例と留意点

◆観察

最もよく使われる方法であり、どの観点の評価方法としても用いることができます。しかし、漠然と観察するのではなく、観察で評価する観点を明確にし、どのような点をチェックするのかといったことを事前に決め、教師用のチェックリストを作成したり、座席表を利用し記録表を作成したりしておくなどの工夫が必要です。

◆ワークシートの記述（アイデアスケッチ・イメージマップ含む）

ワークシートの記述は、授業後に全ての生徒の学習状況について把握することができ、観察などと併用することで補完的に評価を進めることができます。また、「発想や構想の能力」や「鑑賞の能力」の評価を進める上でも、個人の状況を把握するための有効な手立てとなります。そのためには、学習のねらいに沿って、生徒が思考・判断したことを記述することができるようにワークシートを工夫することが大切です。

◆対話

「発想や構想の能力」の評価を進める上で、ワークシート等の記述を補完するために生徒と対話をし、思考・判断したことを見取ることも大切です。特にワークシート等への記述が見られない生徒には、積極的に対話をしていく必要があります。

◆作品

表現の学習においては、学習の成果としての生徒の作品を評価することになります。「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の観点は、制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものであるため、制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の「発想や構想の能力」や「創造的な技能」の高まりを読み取ることが大切です。また、制作途中の作品をデジタルカメラなどで撮影し記録しておき、表現の過程を見取るなどの工夫も有効です。

◆ペーパーテスト

ペーパーテストは評価方法の一つとして有効ですが、ペーパーテストにおいて得られる結果が、目標に準拠した評価における学習状況の全てを表すものではないことについては、十分に認識しておく必要があります。テストの問題を作成する際には観点別に作成し、その観点进行评估する問題として適切であるかどうか十分に吟味しておく必要があります。また、「知識・理解」に関する内容は出題しやすいのですが、美術科における観点の中で、「知識・理解」に特化した観点はないことから、「知識・理解」に関する内容を出題する際は、それらがどの観点に関わる評価として位置付けるかなどについて明確にしておくことが大切です。



中学校美術科における学習評価事例 1

題材名 個性がきりり！オリジナルのアクセサリーづくり
第2学年及び第3学年「A表現(2)(3)」 「B鑑賞」

■題材全体を見通して、学習評価の
進め方が分かる事例

<題材の概要>

使う人の好みやアクセサリーとしての美しさなどを考え、材料やデザインを工夫し作品を制作します。木材や金属などアクセサリーのイメージに適した材料を選び、材料や表現方法によって加工の工程などを考え見通しをもって制作します。また、生徒同士の作品を鑑賞し、よさや美しさ、作者の意図と表現の工夫などを、自分の価値意識をもって味わいます。

<対応する学習指導要領の指導事項>

- 「A表現」(2)：目的や機能を考えた発想や構想
 - ウ 使用する者の気持ちや機能、夢や想像、造形的な美しさなどを総合的に考え、表現の構想を練ること。【発想や構想の能力】
- 「A表現」(3)：発想や構想をしたことなどを基に表現する技能
 - イ 材料や用具、表現方法の特性などから制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって表現すること。【創造的な技能】
- 「B鑑賞」(1)：美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう鑑賞
 - ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和の取れた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。【鑑賞の能力】

1 題材の目標

アクセサリーの表現に関心をもち、使用する者の気持ちや造形的な美しさなどを考え表現の構想を練り、表したい形のイメージに応じて材料や表現方法を工夫し創造的に表現するとともに、アクセサリーとしての美しさや作者の思いを感じ取り、自分の価値意識をもって味わう。

2 題材の評価規準及び学習活動に即した評価規準

(1) 題材の評価規準

	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
表現	・美術の創造活動の喜びを味わい、 <u>使用する者の気持ちやアクセサリーとしての美しさなどを</u> 考えて表現することに関心をもち、主体的に造形的な美しさなどを総合的に考えて構想を練ったり材料や用具の特性を生かしたりしようとしている。	・感性や想像力を働かせて、 <u>使用する者の気持ちやアクセサリーとしての美しさなどを</u> 基に形や色彩などの効果を生かして造形的な美しさなどを総合的に考え、表現の構想を練っている。	・感性や造形感覚などを働かせて、材料や用具の特性を生かし、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫したり、制作の順序などを総合的に考え見通しをもったりしながら、創造的に表現している。	・感性や想像力を働かせて、 <u>アクセサリーとしての美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り味わっている。</u>
鑑賞	・美術の創造活動の喜びを味わい、 <u>他者の作品に関心をもち</u> 、主体的に見方や理解を深めようとしている。			

「評価規準に盛り込むべき事項」を基に、題材の内容に合わせて、言葉を省略したり変更したりしている。(下線部は変更箇所)

(2) 学習活動に即した評価規準

	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
表現	①使用する者の気持ちやアクセサリとしての <u>美しさ</u> などを総合的に考えて表現することに <u>関心</u> をもち、主体的に構想を練ろうとしている。	①使用する者の気持ちやアクセサリとしての <u>美しさ</u> などを、 <u>形の単純化や組み合わせ、色彩</u> などの効果を生かして総合的に考え、表現の構想を練っている。	①材料や用具、表現方法の特性などから制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって表現している。	① <u>アクセサリとしての洗練</u> された美しさ、作品全体のイメージ、つくり手の意図や思いなどを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっている。
表現	②材料や用具、表現方法の特性などから制作の順序などを主体的に考え、表現しようとしている。			
鑑賞	③ <u>アクセサリとしての洗練</u> された美しさ、つくり手の意図や思いなどに関心をもち、主体的に感じ取ろうとしている。			

「評価規準の設定例」を基に、題材の内容に合わせて、言葉を省略したり変更したりしている。(下線部は変更箇所)

3 題材の指導と評価の計画 (8時間)

学習のねらい、学習活動 ※「○」は、学習のねらい 「・」は、学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法、留意点等
	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力	
1次 課題の把握と発想・構想(3時間) ○アクセサリの表現について理解し、題材への関心を高める。 ・参考作品などを鑑賞し、作者の意図や表現の工夫などについて意見を述べ合う。 ○使用する者の気持ちやアクセサリとしての <u>美しさ</u> などを、形や色彩の効果を生かして考え表現の構想を練る。 ・イメージマップやアイデアスケッチなどにより構想をまとめる。	関①	発①			関① 【観察、イメージマップ、アイデアスケッチ】 - ここでは、生徒がアクセサリの表現に関心を持ち、主体的に構想を練ろうとする意欲や態度を高めることが重要である。そのため、1次の前半には題材に関心をもてず、構想を練ろうとしていない生徒を把握することに重点を置き、それらの生徒に対しては関心や意欲が高まるように机間指導等をする。 1次の後半に、発想や構想を練るためにイメージマップを書いたり、アイデアスケッチなどを繰り返し描いたりしている様子を見取り、記録用紙等に評価の記録を残していく。活動の観察を基に評価するが、全ての生徒の評価が難しいことから、ワークシートに記述した内容も補完的に評価する。 発① 【イメージマップ、アイデアスケッチ】 - ここでは、使用する者の気持ちやアクセサリの機能、造形的な美しさなどを、形自体がもつ効果や、形の単純化や組み合わせ、色彩などにより得られる効果を生かして総合的に考え、表現の構想を練ることが重要である。1次前半の構想を練り始めた段階では評価の記録を取らず、生徒が共通につまづいている点を学級全体に指導したり、個々の生徒の課題に対して個別指導をしたりする。学習が進み多くの生徒が構想がまとまってきた時点で、まだ構想がまとまらない生徒に重点を置いて見取るとともに、構想がまとまるように指導する。 - この段階の「発想や構想の能力」の評価は、実際に立体作品になった状態等が十分に見取れないので、暫定的に「おおむね満足できる」状況(B)等
「学習活動に即した評価規準」に示されている実現状況を見るためには、制作を始めた初期の作品よりも、様々な能力等が働いた跡が見られる完成間近の作品や完成作品から評価することが妥当であると考えられる。しかし、最終的に目標を実現するためには、①主題を生み出し、②アイデアスケッチで構想を練り、③材料や用具を生かして作品を制作する、といった①～③の学習が確実に行われることが大切である。そのためには、それぞれの段階で「学習活動に即した評価規準」を位置付け、つまづいている生徒を見取って適切な指導をし、一人一人の生徒が階段を迫って確実に学習を進められるようにする必要がある。					

2次 制作(4時間) ○構想を基に、自分の表現意図に合う材料や表現方法を工夫するなどし、見通しをもって表現する。 ・構想を基に、アクセサリーの材料を選び、表現方法の特性から制作の順序や加工法を考え制作する。 ○構想を深める。 ・制作途中の気づきを基に、構想に改善を加え、表現方法を工夫しながら制作をする。	関②	発①	創① 創①		関② 【観察，制作途中の作品】 ・ここでは、生徒が構想に基づいて材料や表現方法を主体的に工夫し、見通しをもちながら表現していこうとする創造的な技能への意欲や態度を高めることが重要である。2次の前半は、制作への意欲がもてない生徒を把握し、関心や意欲が高まるように指導する。2次の後半に、構想を基に、材料や表現方法、加工法などを工夫している様子を見取り記録用紙等に記録を残していく。活動の観察を基に評価するが、全ての生徒の評価が難しいことから、制作途中の作品もデジタルカメラ等で記録するなどしておき補完的に評価する。 創① 【制作途中の作品】 ・2次の前半では、多くの生徒が材料や表現方法、加工法などを工夫して表現できるようになってきた時点で、工夫等ができていない生徒に重点を置いて見取るとともに、工夫等ができるように指導をする。完成が近付いてくる2次の後半は、「十分に満足できる」状況(A)と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。また、ここでの評価も「発想や構想の能力」と同様に、完成作品から再度確認する。 発① 【制作途中の作品】 ・完成が近付いてくる2次の後半は、「十分に満足できる」状況(A)と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。また、授業中に評価を行った後に作品が変化する場合もあるので、更に、作品の完成後、完成作品をアイデアスケッチ等と見比べながら再度評価し、授業中での評価より高まりがあった場合は修正を加える。
3次 鑑賞(1時間) ○完成作品を鑑賞し、作品全体のイメージ、作者の意図や思いを感じ取り、そのよさなどを味わう。 ・お互いの作品を鑑賞し合い、作者の意図や表現の工夫などについてワークシートに記入し、意見を述べ合う。	関③		鑑①	鑑①	関③ 【観察，ワークシート】 ・ここでは、生徒が主体的に作品のよさや美しさ、作者の意図や思いと創造的な表現の工夫などを感じ取ろうとしていく意欲や態度を高めることが重要である。評価は、生徒が他者の作品を鑑賞する様子などを基に、鑑賞への関心や意欲等を把握することに重点を置く。活動の観察を基に評価するが、全ての生徒の評価が難しいことから、ワークシートに記述した内容も補完的に評価する。 鑑① 【ワークシート】 ・ここでの評価は、生徒のワークシートの記述や発言内容から行うことになる。しかし、授業中に鑑賞の指導をしながら全ての生徒を評価することは困難であることから、まず、授業中は、鑑賞が深まっていない視点等について、個々の生徒や学級全体に助言をするために学習状況を把握することに重点を置く。授業終了後、ワークシートの記述を基に個々の生徒の評価を行う。
<授業外> 【完成作品等の評価】 【ワークシート等の評価】		発①	創①	鑑①	※発①・創①については、完成作品から再度評価する（授業内での評価を確認し、必要に応じて修正する）。特に発想や構想については、アクセサリーのコンセプトや構想の工夫を記述したワークシート等を合わせて見取り評価する。

	第1次	第2次	完成作品
生徒ア	B	B	B
生徒イ	C	B	A

表は、本題材におけるア、イの2人の生徒の「発想や構想の能力」の高まりを例示したものである。生徒アは1次にアイデアが高まり、構想をまとめることができているが、その後あまり深まっていない。一方、生徒イは1次にはアイデアがまとまらなかったが、2次から発想や構想が深まり、完成作品の段階で「十分に満足できる」状況(A)を実現している。「発想や構想の能力」は、授業が進むにつれて高まり、その成果が制作中の作品に積み重ねられていく傾向が見られるので、この場合の総括の方法としては、その能力がどこまで高まったかを見ることとし、生徒アは「B」、生徒イは「A」と総括することが考えられる。

「創造的な技能」についても同様に進めることが考えられる。

中学校美術科における学習評価事例 2
 題材名 木版摺更紗着物を鑑賞しよう
 第1学年「B鑑賞」

■「鑑賞の能力」の評価の進め方が分かる事例

<題材の概要>

全2時間中の1時間目は、木版摺更紗着物の文様のモチーフが何かということを形や色彩を基に考えます。2時間目は、木版摺更紗着物の文様とイギリス更紗の文様を比較鑑賞し、表現方法の違いに気付くとともに、木版摺更紗着物の特徴や自然や季節の表現のよさや美しさなどを味わいます。ここでは、2時間目について示します。

<対応する学習指導要領の指導事項>

- 「B鑑賞」(1)：美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう鑑賞
 イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。
- 【鑑賞の能力】

<主な鑑賞作品>

- ・鈴田滋人「紫陽装華」
- ・ウィリアム・モリス「バラ」

1 題材の目標

木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様に関心をもち、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図、創造的な表現の工夫などを感じ取るとともに、木版摺更紗着物とイギリス更紗の文様の表現方法の違いなどから、木版摺更紗着物の特徴や自然や季節の表現のよさや美しさなどに気付き、美術文化に対する関心を高める。

2 題材の評価規準及び学習活動に即した評価規準

(1) 題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
・美術の創造活動の喜びを味わい、 <u>木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様</u> に関心をもち、主体的によさや美しさを感じ取ろうとしている。	・感性や想像力を働かせて、 <u>木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様の造形的なよさや美しさ</u> 、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り見方を広げたり、美術文化の特性やよさなどに気付いたりしている。

「評価規準に盛り込むべき事項」を基に、題材の内容に合わせて、言葉を省略したり変更したりしている。(下線部は変更箇所)

(2) 学習活動に即した評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
① <u>木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様</u> に関心をもち、主体的にその特徴や美しさを感じ取ろうとしている。	① <u>木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様</u> を鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、 <u>木版摺更紗着物の特徴や自然や季節の表現のよさ</u> に気付いている。

「評価規準の設定例」を基に、題材の内容に合わせて、言葉を省略したり変更したりしている。(下線部は変更箇所)

3 本時の目標

木版摺更紗着物や諸外国の更紗の文様に関心をもち、それぞれの更紗の文様を比較することで、木版摺更紗着物の特徴や自然や季節の表現のよさに気付く。

4 本時（2／2）の指導と評価の計画

学習のねらい，学習活動 ※「○」は，学習のねらい 「・」は，学習活動	学習活動に即した評価規準				評価方法，留意点等
	美術への 関心・意 欲・態度	発想や構 想の能力	創造的 な技能	鑑賞の 能力	
○日本や諸外国の更紗の文様を比較することで，木版摺更紗着物の特徴や自然や季節の表現のよさに気付く。 ・日本や諸外国の文様をカードを使って鑑賞し，どのような特徴があるかをグループで検討し分類することで，それぞれの特徴を知る。 ・木版摺更紗着物とイギリス更紗の文様を比較鑑賞し，気付きや考え等をグループや全体で説明し合い，表現の違いに気付く。 ・木版摺更紗着物の鑑賞を深め，気付きや考え等を全体で説明し合い，特徴や自然や季節の表現のよさに気付く。	関①			鑑②	関① 【観察，ワークシート】 ・ここでは，木版摺更紗着物と諸外国の更紗を鑑賞し，造形的なよさや美しさ，表現の工夫や違いなどに関心をもち，主体的によさや美しさを感じ取ろうとする意欲や態度を高めることが重要である。生徒が作品を見たり，発言したり，ワークシートを記述したりする様子から関心や意欲がもてない生徒を把握し，意欲が高まるように指導する。活動の後半に，特に意欲的に作品のよさなどを捉えようとして発言する姿が繰り返し見られるなど，顕著な状況がある場合には，「十分満足できる」状況(A)にあると評価する。しかし，全ての生徒の評価が難しいことから，授業後にワークシートに記述した内容も補完的に評価する。 鑑② 【ワークシート】 ・ここでは，生徒のワークシートの記述や発言内容から評価を行うことになる。しかし，授業中に鑑賞の指導をしながら全ての生徒を評価することは困難であることから，授業中は記録のための評価ではなく，より適切な指導をするための評価を中心に行う。そして，ワークシートの記述や発言内容から，鑑賞が深まっていない視点等について，個々の生徒や学級全体に助言を行うことに重点を置く。記録に残す評価は，授業終了後にワークシートの記述を基に評価することが基本になる。
<授業外> 【ワークシートの評価】				鑑②	

<鑑①の評価の具体例>

○ワークシートの例

問2 木版摺更紗着物の特徴やよさはなんでしょう。分かったことや気付いたことを書いてください。

生徒ア 木版摺更紗着物は花の形から文様をデザインしていて，同じ形をくりかえしている。色もとてもきれいだと思いました。

生徒イ 木版摺更紗着物は，見たものをリアルに描くのではなく，印象に残ったことを描いている。花など植物を描いているものが多くて，自然や季節を大切にしている感じがした。

【鑑賞の能力】の評価

生徒アは，木版摺更紗着物の文様が花などをモチーフにデザインしていることや，同じ文様を繰り返し描き全体を構成しているという特徴に気付いているので，「おおむね満足できる」状況(B)と判断しました。

生徒イは，比較鑑賞したイギリス更紗の文様が花の形を写實的に表現しているのに対して，木版摺更紗着物の文様は花の印象を大切に単純化しているという特徴及び作者の意図に気付いており，さらに，モチーフから自然や季節を表現していることに気付いています。したがって，「十分満足できる」状況(A)と判断しました。

中学校美術科における学習評価の進め方 Q & A

Q 一つの題材で観点別評価の総括をするにはどうしたらよいですか？

A 「学習活動に即した評価規準」に照らして、「A」、「B」、「C」の3段階で行った評価結果を基に、題材として観点ごとに「A」、「B」、「C」で評価の総括を行います。ここでは、「学習活動に即した評価規準」の評価結果のうち、最も数の多い記号が、題材ごとにおける観点ごとの学習状況を最もよく表しているという考え方に立って総括しています。例えば、ある観点の「学習活動に即した評価規準」を3つ設定し、それぞれの評価結果が「A、A、B」なら、「A」と総括します。ただし、「A」、「C」の両方が含まれている場合は、「B、B」と同様の評価結果と見なして総括するのが適当であると考えます。また、評価結果が「A、B」のように「A」と「B」の数が同数になる場合は、例えば、学習のねらいや時間数等に応じて、特定の「学習活動に即した評価規準」に重み付けをすることや、「A」、「B」が同数であれば「A」とするなど、あらかじめ総括する方法を決めておくことが大切です。

観点	美術への関心・意欲・態度				発想や構想の能力			創造的な技能		鑑賞の能力	
氏名	評価規準			評価	評価規準		評価	評価規準	評価	評価規準	評価
	関①	関②	関③		発①	発②		創①		鑑①	
生徒ア	B	A	A	A	B	A	A	B	B	B	B
生徒イ	B	A	B	B	B	B	B	A	A	A	A
生徒ウ	C	C	B	C	B	C	C	C	C	B	B

- ・「美術への関心・意欲・態度」については、「表現」において関①、関②と「鑑賞」において関③の場面で評価を行ったとします。「美術への関心・意欲・態度」は表現や鑑賞の活動を通してある程度継続的に実現していることが大切なので、「表現」の場面において評価した結果と「鑑賞」の場面において評価した結果を同等に扱うことが考えられます。ここでは、生徒イの評価のように関①が「B」、関②が「A」、関③が「B」であれば「B」と総括します。
- ・「発想や構想の能力」については、内容のまとまり「A 表現(1)(3)感じ取ったことや考えたことの表現」において、主題を生み出す場面の発①と、主題を基に構想を練る場面の発②で評価を行ったとします。仮にこの題材での「発想や構想の能力」は、主題を生み出すことよりも、主題を基にどのような構想を練ったかが重要であると判断し重み付けをした場合は、例えば生徒アの評価のように、発①が「B」で発②が「A」であれば「A」と総括します。

Q 1 単位時間に全ての観点の評価をしなくてよいのですか？

A これまでは、指導に生かすための形成的な評価と通知表や指導要領などのために記録に残す評価を混同して、1 単位時間に数多くの評価規準を設定している場合が多く見られました。その結果、1 単位時間の中で、個々の生徒の学習状況を確実に評価できていなかったことも多かったと思います。これからは、通知表や指導要録などのために記録に残す評価については、1 単位時間に1 回または2 回程度でよいかわりに、設定した評価規準については、確実に個々の生徒の学習状況を評価し、記録に残すことが必要となります。美術の表現活動においては、「発想や構想の能力」や「創造的な技能」は作品から見取

ることができますが、完成作品からのみ評価するのではなく、主題を生み出し、アイデアスケッチで構想を練り、材料や用具を生かして作品を制作するといった制作のそれぞれの段階で「学習活動に即した評価規準」を位置付け、つまづいている生徒を見取って適切な指導を行い、それぞれの段階で全ての生徒が、少なくとも「おおむね満足できる」状況(B)と判断できるようにしたいものです。

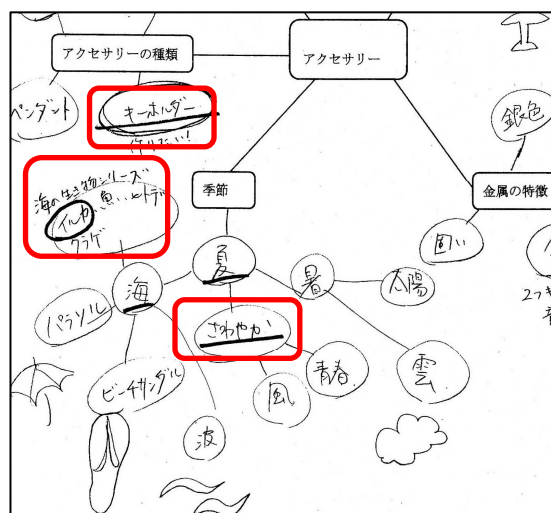
Q 「発想や構想の能力」を評価するときにはどのような工夫が必要ですか？

A 「発想や構想の能力」を評価する際は、主題を生み出し、構想を練る段階において、ワークシート(イメージマップ、アイデアスケッチ等)にそのことについての記述がなければ見取ることが難しくなります。よって、生徒の思考やその過程、表現の工夫を思いついたことなどを書き込むことができるようなワークシートを作成し、適宜、記入をさせておくことが大切です。

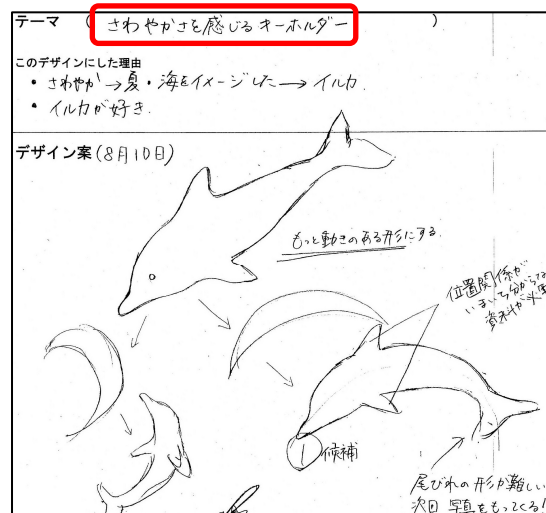
- ・イメージマップからは、生徒がどんな発想をしたかを読み取ることができます。
- ・アイデアスケッチからは、形や色の工夫点など、構想を読み取ることができます。スケッチだけではなく、考えを記述させるとより分かりやすくなります。

<ワークシートの例 題材「オリジナルのアクセサリーづくり」>

イメージマップ



アイデアスケッチ



なお、制作途中の作品からは、例えば「イルカの体の中央にイニシャルを浮き彫り状に入れる」などのように、制作が進む中で思いついたアイデアや、アイデアスケッチでは記されていない新たなアイデアが生まれるなど、構想が深まっている状況を見取することができます。その際は、観察だけでもよいと思いますが、デジタルカメラ等で適宜撮影して全員の記録を残しておくことにより、生徒の表現のプロセスを見ることや、後日、改めて評価内容の確認をすることなどができます。

また、ワークシートの記述などで、生徒の発想や構想がうまく読み取れない場合は、生徒との対話などを通して、見取るなどの工夫も必要です。

この手引きは、国立教育政策研究所で公開されている「評価規準等の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(中学校)などを参考にして、作成しています。以下のURLをご参照ください。

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryuu.html>